

第41回全日本中学生水の作文コンクール



内閣総理大臣賞(最優秀賞)

水…

時空を超えてすべてをつなぐ

福岡県 福岡教育大学附属福岡中学校 1年 宇野 誠洋

私は水が大好きです。実は学校に毎日持っていく水筒の中身を水にしたいのだけれど、「お茶は栄養や殺菌効果があっていいのよ。」と母に言われて、無理に持たされます。しかし、走って登校すると水筒のお茶は泡だらけで、飲んでも口の中がすっきりしません。結局学校の水道水を飲むこととなります。特にスポーツのあとは水に限ります。飲むとからだ中が透き通るような最高の気分になるからです。

先日、探査機「はやぶさ2」の成果で、小惑星リュウグウにも水があったようだと発表されました。さらに、リュウグウの水と、私たちが飲んでいる地球の水は「生みの親」が同じらしいということに、私は大変驚きました。はるか宇宙の彼方にあるリュウグウとこの目の前の水道水はつながっていたのです。

そして理科で習ったように、そもそも飲み水となる雨は、地球の自然の原理で大昔から循環してきたものであり、この水も大昔の水の生まれ変わりだと言えます。

その水を利用して水道水が作られ、毎日私たちの体の中に水が入っていきます。体のほとんどが水でできているという私たち人間にとって、生きるのに欠かせない「水を飲む」という行為は、実ははるか遠い宇宙と、そして恐竜がいた太古の昔とをつなげる、時空を超えてつながる行為だったのです！地球上で植物は水を利用して成長し、それを食べて生きる草食動物を肉食動物が食べる、この食物連鎖で自然界は成り立っています。このように命をつなげていくことにおいても、すべての場面で水がないと始まりません。つまり、水は時空を超えてすべての命をつなげるものなのです。

春の訪れを感じる先日、私は現在建設中の小石原川ダムを見学しました。一昨年、九州北部大水害で被災した東峰村に位置する建設現場で、私は二つのことを学びました。

一つは自然保護のために、環境アセスメントを実施し、もともとそこにあった環境を壊さないために、ていね

いに徹底して保護活動をする姿勢です。小石原川ダムの場合、朝倉地方の豊かな自然の中にそれまで住んでいた動物達の保護や、貴重な種類の木を植え替える。そして仕方なく切った木を補償するため新たに植林しつつ野生の鹿に若木を食べられないように一本一本ていねいにカバーを掛けて保護するなど、樹木医も関わる活動を見学してその愛情を実行する行動に感動しました。

もう一つは自然の犠牲や負担、そしてコストを減らすために、現地の自然環境を最大限に生かして工夫する姿勢です。近くにある二つの山を門のように利用するアーチダムや、現地でとれる鉱物を利用したロックフィルダム、そして最終手段としてのコンクリートダムの選択など、ダムを形式を自然に優しい視点で選ぶ工夫がされていることを知り、その知恵の深さに思わずうなりました。

実は見学をする瞬間まで、ダム建設とは人間が生きていく上で欠かせない飲み水の確保のために、必要最低限自然を切り拓き壊すしかない行為だと思い込んでいました。ダムは人工物として最大の建造物であり、威風堂々とそびえ立つ恐ろしいくらいの人間の力を見せつける物のように見えていました。しかし事実は違いました。人間と自然が共存するための手段だということに気がきました。それは自然を大切にしつつ自然の一部である人間を生かす方法だと発見しました。この瞬間、ダムと大自然そして地球と宇宙がつながり一つになって透き通った水になり、静かに私の中に流れてきて、さわやかにからだ中がうるおいいっぱいになる感じがしました。

今日も水道水を飲みます。そしてあの日以来それはいっそうおいしくなりました。だって水を飲むたびに、無数の星々が輝く大宇宙を泳いでいる様な気持ちになれるのですから。

独立行政法人水資源機構理事長賞(優秀賞)

人災を封じ災害を防ぐ

愛知県 扶桑町立扶桑中学校 2年 真野 聡真



ある日、ふとテレビを見たら、愛知県知多市にある佐布里池のトピックスが放送されていた。その内容は驚くべきものだった。なんと、大きな調整池の水を全て抜くというもの。私はその番組を見て一体どういう意味なのかと好奇心に後押しされてすぐに佐布里池を訪れた。到着するやいなや、池の水位が低くなっていることに気がついた。写真と比べるとその差は歴然である。池のほとりを歩いていると、一つ疑問が浮かんできた。

「何故この広大な池の水を抜くのか」
近くにある資料館の職員の方に尋ねると、どうやら堤体の補強工事の為だという。又、その資料館には、愛知用水の建設に関わり佐布里池の建設にも携わった男性が来館されており、その方曰く、「元々この場所は池の建設に適しておらず、避けるべきだと言ったが、そのまま工事が進んでいった」という。自然災害が増している昨今、耐震性や強度を見直し、池周辺や下流の人々が安全に暮らす為に改良を続けていかなければならない。又これらは池やダムだけではなく、街の施設や各家庭でも重要なことであると感じた。

そんなことを思っている矢先に、私は驚愕のニュースを目にした。ブラジル南東部のミナスジェライス州の鉱山用ダムが決壊し、死者・行方不明者あわせて350人を超える痛ましい事件だ。これは、地震や豪雨などの自然災害によるものではない。管理会社が決壊の危険があることを知りながら対応をしなかったという。又、決壊時に周囲に避難を促すサイレンも、一切作動しなかったという。防ぐこともできたであろうこの事件によって多くの尊い命が奪われ、老若男女の夢が瞬く間に消し去られたことに、憤りを感じた。この事例と前述の佐布里池を照らし合わせると、佐布里池の補強工事がいかに重

要であるかが手にとる様に分かる。私はこの事件を教訓として、一刻も早く世界各国で同状況のダムやため池の整備がされ、「人災」によって失われる命を一人でも多く守ることの取組がなされることを切に願う。

「人災」は防ぐことはできても、「自然災害」は、完全に防ぐことは困難である。だが、それに備えることはできる。2年前、九州北部豪雨が発生した。連日メディアで放送される映像は普段私達があらゆる所で使っている水が突然と姿を変え、容赦なく街を襲い人々を飲み込む化物へと豹変したのだ。そんな中、福岡県朝倉市にある寺内ダムは洪水を貯水し大量の土砂や流木が下流への流出を防ぎ、被害の拡大を食い止めた。これは、備えが功を奏し、多くの命を救ったのだ。しかし翌年、台風7号によって起きた、西日本豪雨では、愛媛県西予市などのダムで、想定を遥かに上回る雨量により安全基準の6倍という異例の洪水が下流へ流された。又、住民への避難を促すスピーカーが異常な降雨の為聞こえなかったという。これらにより、9人の命が奪われた。ダムは、あらゆる「想定外」を考慮し、建設されているが、今回その想定を上回る雨量により人々の命を奪う事態となった。今回を教訓とし、様々な事態に対応するキャパシティを広げ、同じことを繰り返さない様に次代に引き継いでほしいと感じる。

前述の如く、私達が生きる為に必要であり、日々当たり前のように使っている水は、時として、人の命を瞬く間に奪う。そんな水がもたらす水害に対応する為、私達ができることは、水について知ること。いつ起きるか分からない災害に各家庭で万全の備えをし、様々な想定で家庭や友人と話し合う。このような一人一人の意識によって、自然災害が無くなること、災害が起きた時に多くの人が救われることを、心より願う。

「第41回全日本中学生水の作文コンクール」で表彰された方々については、国土交通省ウェブサイトでご覧になれます。
http://www.mlit.go.jp/mizukokudo/mizsei/tochimizushigen_mizsei_tk1_000010.html

